

神田祭（能色相図・しめろやれいろのかけごえ）

へ秦の始皇の阿房宮 その全盛にあらねども 粋な心も三浦屋の 茶屋
は上総屋両助と 機転も菊の籬さえ 山谷風流あらましを 松のくら
いの品定め

へ一歳を今日ぞ祭に当り年 警固手古舞華やかに 飾る 棧敷の毛氈も
色に出にけり酒機嫌 神田ばやしも勢いよく きても見よかし花の
江戸へ祭に對の 派手模様 牡丹 寒菊 裏菊の 由縁もちょうど花尽し
へ祭のなア 派手な若い衆が 勇みに勇み 身なりを揃えて ヤレ囃せ
ソレ囃せ 花山車 手古舞 警固に行列 よんやさ へ男伊達じやの ヤ
レコラサ 達引きじやのと 言うちや私に 困らせる へ色の欲ならこっ
ちでも

へ常から主の仇な氣を 知っていながら 女房になつて 見たいの欲が
出て 神や仏を頼まずに 義理もへちまの皮羽織 親分さんのお世話
にて 渡りもつけて これからは 世間構わず 人さんの前は ばからず
引き寄せて 楽しむ内に またほかへ それから 闇と口癖に へ森の小
鳥我はまた 尾羽をからすの羽さえも へなぞと あいつが 得手物の
ここが 木遣りの家の株

へヤア やんれ引け へよい 声かけて エンヤラサ やつと 抱き締め 床
の中から 小夜着蒲団を なぐりかけ 何でも こつちを 向かしやんせ
ようい へ よんやな 良い 仲 同士の 恋 諍いなら 痴話と 口説は 何
でも かんでも 今夜も せオ、東雲の 明けの 鐘ゴンと 鳴るので 仲直
り 済みました ようい へ よんやな そよが 締めかけ 中網 えんや
へ へこれは あれは さの えへオ、えんやり よう

へげにも 上なき 獅子王の 万歳 千秋 限りなく 牡丹は 家のものにして
お江戸の 恵みぞ 有り 難き。